

ストレンナ 2018 の紹介

2017年7月16日 ローマ
カルメルの聖母の祝日

ストレンナ

「主よ、その水をください」

(ヨハネによる福音書 4 章 15 節)

耳を傾け、共に歩む生き方を深めよう

STRENNA

«*Sir, give me this water*» (Jn 4,15)

LET US CULTIVATE THE ART OF LISTENING AND OF ACCOMPANIMENT

まとめ - 今年終わりに送られるストレンナについて要約します。はじめに申し上げますが、これはストレンナ 2018 の解説ではありません；ここでは、いつくか考えるべき点を紹介するに留めます。

全体をまとめるストレンナの言葉は、ヤコブの井戸でサマリアの女がイエスに言う心からの願いです。イエスとの出会いの中で、サマリアの女は耳を傾けてもらった、尊重された、大切にされたと感じます。そのため、さらに貴重なものを願うよう駆り立てられるのを心のうちに感じます。「主よ、その水をください」（あなたが私に差し出しておられる豊かな命の水）。

福音書のこの箇所を中心テーマに続き、来たる司教シノドス（「若者、信仰そして召命の識別」）という文脈で、私たちサレジオ家族の皆にとって、そして世におけるサレジオ家族の使命のため、耳を傾けること、共に歩むこと、その貴重なわざを培うことの大切さを指摘します。人として、キリスト者としての成長、召命の成長の歩みにおいて、確保しなければならない条件、耳を傾けること、共に歩むことの両方に関して要求されること、そのための奉仕について見ていきます。

I. 心を揺り動かさずにはおかない出会い

私たちの考察の出発点は、「イエス、サマリアの女と出会う」（ヨハネ 4・3 - 42）というエピソードとして知られる福音箇所を静かに、黙想しながら読むことでなければなりません。その出会いは、主がどのようにサマリアの女と関わるか、イエスが築かれる絆、その結果、イエスとの出会いがその女性の人生にもたらす影響を見るためのアイコンとなります。

「サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、『水を飲ませてください』と言われた。弟

子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、『ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか』と言った。」
(ヨハネ4・7-9)

イエスは、実際的な必要を前にして無力で弱い状態にあります。サマリアの女にとっては、イエスは外国人で、のどが渇いている、水を汲む桶を持っていない、その深い井戸の水に手が届かない。

他方、この物語から推察するかぎり、この女性は控えめに言っても評判に問題があり、“規範から外れた”状況を生きています。

さらに、イエスとサマリアの女の間には根強い民族的、宗教的な慣例の壁があり、当時の習慣では、イエスがこの女に水を願うのは非難に値する行為でした。

この状況で、私たちの観点から非常に興味深いことが観察されます：世俗の場所、田舎の野外の井戸が、神との出会いの場となる、ということです。

本当の主演であり、この出会いを導く方であるイエスは、耳を傾け、対話を始めながら、この出会いのために“計画をもっておられ”ます。相手に、直観的に知っておられる状況に耳を傾けることから出発しながら。

今日、私たちにとり、**耳を傾ける**というプロセスはまさに“art たくみのわざ”です。「私たちは、聞くだけではなく、聴くすべを身につける必要があります。聴く技術はまず、他者とのコミュニケーションの中で寄り添うことのできる心の力で、これがなければ真に霊的な出会いにはなりません。」¹

この**耳を傾ける**プロセスは出会いから始まり、自由に入っていく人と人の関わり・絆の機会となります。「尊敬といつくしみ、また同時にキリスト教生活をはぐくむためのいやしと解放と励ましを与えるまなざしを注ぎながら」。²

このように出会いが起こるとき、さまざまな要素の中でも**耳を傾ける**ことは：

- 相手に心を開く姿勢を育てます。
- 自分の注意のすべてを相手の言おうとしていることに向け、相手が伝えようとしていることを理解するために意識的に努力します。
- 心からの関心をもって、その人に、また探求されていること、期待されていることに寄り添って歩む。
- 相手の世界、状況に近づくため、できるかぎり自分の世界、自分の状況を脇に置く。
- 耳を傾けることは、簡単に言うと、その人、その人の葛藤、弱さ、喜び、苦しみ、期待などに、**配慮に満ちた注意を向ける**ことを求められる“art たくみのわざ”です；実はそれは何かを聞くということに限定されません、むしろ、一人の人に心に向けるのです。
- この耳を傾けるということは、個人の霊的同伴の場合、心理的次元を超えて、**霊的、宗教的次元を持つ**ようになります。なぜなら、「ある方」を待つ道を歩むよう私たちを導くからです。
- 特別な意味で若者に、そして若者の家庭・家族の生活に向けられた教育者としての私たちのまなざしは、一人ひとり、どの人の心にも**肯定的なものがたくさんある**ということ³；そして、私たち自身に注意を向け、他者への開かれた姿勢、耳を傾けること、ふり返ることに注意を向ける**忍耐強い努力**を通して、この肯定的な要素を引き出す必要があることを、再確認させてくれます。

¹ 『福音の喜び』 171

² 『福音の喜び』 169

³ 「どの少年の心にも……やわらかなところがあります。教育者の最初の務めは、その感受性のある部分、少年の心の応答する琴線を見つけることです。」メモリエ・ビオグラフィケ 237 参照、第 23 回総会文書 151 に引用。

この耳を傾けるということによって私たちは、現代の若者のニーズ、また時にはその両親のニーズ、あるいは奉仕職を通して私たちが出会う人々のニーズを、正しく理解するように導かれなければなりません。実際、若者は同伴を求めてというよりも、むしろ必要に駆られて、疑いや問題、緊急事態や困難、対立、緊張、決めなければならない問題、対応を迫られる困った状況などに直面するとき、私たちのもとに来ることが多いのです。

そして概して若者は、誰かが先に一步踏み出して関心を示し、関わろうとし、自分たちのために時間があるとき、その人に近づくのです。時に、そのような何気ない出会いが、成長へとつながるより真剣な旅へと開く扉になりえます……。

それが、イエスと、ただ水を汲みに井戸へ行った女との間で起きたことなのです。

II. さらに前進するように人を動かす出会い

「イエスは答えて言われた。『もしあなたが、神の賜物を知っており、また、「水を飲ませてください」と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。』

女は言った。『主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。 (…)]

イエスは答えて言われた。『この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。 (…)]

女は言った。『主よ、渇くことがないように、 (…)] その水をください。』

(ヨハネ4・10 - 15)

* イエスは知恵の主として、また対話に長けた人として、人々と接触するために、言葉 - 表情や身振り・行動 - が提供できるすべてを活かします。

- ✓ 質問し、論じ、説明し、物語り、話している相手が物事をどのように見ているかに注意を払い、提案し、確言し、応答を呼び起こします。
- ✓ 女性が自分の現実を、また自分のあいまいな返答を直視できるよう、彼女を助けます。続く箇所「私には夫はいません」と言っているように、その女性の置かれた危うい立場という現実も。
- ✓ 初め抵抗に遭っても、イエスはがっかりしません、あきらめません。
- ✓ その女性是对話に助けられ、いくつかのあいまいな事柄を整理することができ、正直にありのまま自分をあらわします。不思議な、心を揺り動かすイエスの応答によって、女性はひきつけられ、信頼するようになり、自ら驚くことに、人生をより良いものにできるものを本当に望むようになります。

* その人、話している相手にとって最も良いことを求めるイエスは、不賛成やとがめだてなど道徳的判断を伝えるのではなく、むしろ人間的絆を構築します。

- ✓ 非難する代わりに、話し合い、提案します。
- ✓ イエスの話し方、言葉は、相手の心に向けられます。
- ✓ 対話において（具体的にこの場合は、サマリアの女との対話）、イエスは穏やかに話し、その女性の人生を変えることのできる者としてご自分を性急に示したりはされません。特別な、今とは違う、より良い生き方を約束する水の湧く泉に近づけるようになりたいという望みを、相手のうちに徐々に目覚めさせるためです。

* イエスは人間についての専門家です。話している相手の内的世界に注意を向け、大いなる関心を抱いていることがわかります。人の心を読み、調べ、どのように解釈すればよいかご存知です。

主のこのような姿勢は、**識別の賜物**の重要性を理解させてくれます。

教会の伝統では、識別はさまざまに異なる状況において実践されてきました：例えば、時のしるしの識別、倫理的に行動するための識別、キリスト者として満ち満ちて生きる道をたどるための霊的識別、あるいはまた、自分の召命、人生の選択の問題における霊的識別です。

このいずれの状況においても、主との対話、聖霊の声に聞くことが不可欠です；しかし、さらなる識別を可能にする、いくつかの**基本的（根本的）な前提要件**があります。

- 出発点となるのは、一人ひとり、若者、夫婦、あるいは夫婦のどちらか一方が人生に意味を見いだす必要性、意義ある人生にする必要性を感じるように導くものです。その状況で人は、何かが本当にはうまくいっていないと気づきます。
- 調子がよくないとき、生き方に調和がないとき、自分の一部分、あるいは結婚の、家庭の“私たち”のどこかの部分で、真の十全な意味を見いだせないとき、その状況は“存在論的むなしさ”から生じうるもので、しばしば方向性を見失ったり、挫折感に陥ったりすることにつながります。
- 自分たちがガラスの箱の中にいるかのように、目に見える限界や欠陥もなく、年寄りであること、年を取ることも“格好わるい”ことなので許されず……、外面的な生き方をするように仕向ける社会にあって、深みのある生き方と内的生活を育む教育の必要性がますます高まっています。

これらの状況はいずれも、識別によって促し、励まし、支えることのできるものであり、教皇フランシスコがシノドスを準備する書簡⁴で提案されているように、私たちは**認識し、解釈し、選択する**ことによって、識別のすべての歩みに取り組まなければなりません。⁵

- **認識すること**⁶、聖霊の促しに照らされて。

- ✓ 人生・生活の順境、逆境の時に心が明晰であること；本物の内的闘いがある時に。
- ✓ その人の持っているあらゆる情緒的資質が実を結ぶように助け、体験していること、あるいは自分の内に見いだすものが何であるかを特定する。
- ✓ 自分が体験することと自分の心の奥深くにあるものとの間の、協和あるいは不協和に見いだされる“味わい”をとらえる。
- ✓ これらすべては、私たちが黙想すべき神のみ言葉の光に照らされる。沈黙さえ恐れずに、耳を傾ける力；人の感受性を中心に置く。
- ✓ 人間的成熟へと成長する歩みの一環としてすべてを受けとめる。

- **解釈すること**⁷

- ✓ すなわち、一人ひとりのうちに呼び覚まされるものを通して、神の霊が何を行うようその人を呼んでおられるかを理解すること。
- ✓ 解釈すること、自分を解釈することは、忍耐、注意して目覚めていること、そして一定の知識さえも求められる、非常に細やかさを要する取り組みです。社会的、心理的な条件づけがあることを認識しなければなりません。
- ✓ 現実を受けとめなければなりません、同時に、最低限のことで満足する、ある

⁴ フランシスコ、若者、信仰そして召命の識別。世界代表司教会議第15回通常総会。準備文書とアンケート。英語版：Elle Di Ci, Leumann (Torino) 2017, 22-65.

⁵ 同, p. 44, 『福音の喜び』51より引用。

⁶ 参照 同, p. 45-46.

⁷ 参照 同, p. 46-47.

いは楽なことだけに取り組むということがないようにしなければなりません；自分の賜物や可能性を認識すること。

- ✓ 当然、この解釈 - 理解の作業は、次のことがなければ信じる人、キリスト者のうちで発展しません：
 - 主との真の対話（サマリアの女がイエスとしたような対話）。
 - その人の持てる能力すべてがそれに向けられること（起こることを意味のあることと受けとめて行動しながら。イエスとの会話の中でサマリアの女の心のうちにそのような動きが生まれたように）。
 - 聖霊に耳を傾ける経験の豊かな人の助け（福音のこの箇所では、イエスご自身がサマリアの女を導いておられます）。

- 選択すること⁸

そして、その人、若者あるいは妻や夫……が真の人的自由と自らの責任を発揮し、決断をする時が来ます。

サマリアの女は自ら決断をしなければなりませんでした。イエスを無視し、その出会いで何も起こらなかつたかのように生活を続けるか、あるいはイエスに驚かされるために心を開き、この人が自分の内的生活の深みに触れられたと地元の人々を呼びに行くほど、このことに関わるか。

- ✓ 聖霊の光に照らされて識別が行われたときの選択は、多くの場合、その人に自由をもたらし、同時に、生き方の一貫性を要求するものになります。
- ✓ そのため、本当に自由に責任ある人生の選択をするように人々、そして特別な意味で若者を勇気づけることが、信仰の歩み、また人としての成長の（そして考えうるさまざまな召命司牧における）あらゆる真剣なプロセスの最終目標です。

識別は - 教皇は語っています - 「良心に取って代わろうとすることなく、侵すことのできない良心の場を守らせる主要な手段です。」⁹ それはまさに、「私たちは、良心に取って代わるのではなく、良心を形作るように招かれた」¹⁰ からです。サマリアの女との対話の中で、真理と彼女自身の内的生活に向かう歩みに同伴されたイエスの手本に倣って。

III. 人生を変容させる出会い

「ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、『何か御用ですか』とか、『何をこの人と話しておられるのですか』と言う者はいなかった。女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。『さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。』人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。」（…）

「さて、その町の多くのサマリア人は、『この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました』と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女

⁸ 参照 同, p. 47-48

⁹ 同, p.40, n.2

¹⁰ AL 37

に言った。『わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。』」（ヨハネ 4・27-30, 39-42）

- サマリア人の女性は、福音のこの場面に「サマリアの女」として登場し、実に親しい個人的な出会いのうちに生ける水の泉を知るようになってこの場面を去ります。自分に起きたことを同朋に伝えるために走って行かずにはいられないほどです。そしてそのあかしを聞いて、多くの人がイエスのもとにやって来ます。
- この場合はサマリアの女ですが、イエスは出会う人々に考える事柄や知識をさらに提供するのではなく、むしろ成長し、生き方を変える道を差し出されます。律法に由来する知恵の象徴である「ヤコブの井戸」さえもその価値を失い、生ける水に（泉に）取って代わられます。
- イエスとの出会いの中で明らかになる神の姿は、無感動な、遠い、哲学的に冷たい神ではありません。その反対に、イエスは、命を与える神、父と呼ぶことのできる神、神は霊なので（霊と真理において礼拝する）、相手との関わりを断ち切ったり、相手を操作したり所有したりしようとする神として、ご自身を明かされます。
- この出会いの結末は、人が予想する普通の結末、女が水で満たした瓶をたずさえ、いつもの生活に戻るといった結末を超えます。隣人たちを呼びに行くために女が空のまま後に残す水瓶は、損失ではなく、得たものを私たちに語るのです。

イエスのように……共に歩む

時代を通して神がご自分の民に約束されるとおり、共に歩んでくださったことを第一に伝える話が聖書に数多くあります。

二つの契約の境界に、洗礼者ヨハネが、まず福音書におけるイエスご自身の最初の霊的同伴者として現れます。ヨハネは、神が心に語りかけたので、あかしをし、道を備えることができました。

新約聖書の数々の場面で、イエスはご自身を伝え、同時代の人々と親しく出会うために、隣人になり、旅の道連れになります。

主のサマリアの女との出会いは、神の霊がいかにかに一人ひとり、すべての男性、女性の心に働かれるか、私たちの理解を助けます。その人間の心は、弱さと自らの罪のためにしばしばすっかり混乱、分裂し、誘惑や、往々にして互いに矛盾するさまざまな提案に惹きつけられています。¹¹

この人間のジレンマを前にして、**個人の同伴**は、キリスト教の霊的伝統の非常に有効な手段として浮かび上がります。主の現存に気づき、主の投げかける挑戦や呼びかけに気づかせる、さまざまな道具や源泉を活かせるよう、信じる人々を助けようとするものとして。

同伴をどのように説明できるでしょうか？ 例えば、「人生・いのちを喜んで受けとめ、人生・いのちに寄り添って共に歩むための、仲間同士のある種の継続的な会話」¹²；障害となりうるものを乗り越えられるように助けながら、その人と主との絆を育むことを目的とす

¹¹ 教皇フランシスコ、シノドス文書、o.c. p. 50

¹² LOLA ARRIETA, *Aquel que acompaña sale al encuentro y regala preguntas de vida para andar el camino* (Apuntes provisionales). Simposio CCEE. Barcelona, 2017, 11.

る対話。

あらゆる**出会い**におけるイエスのように、同伴のどの体験にも次のことが必要です：

- ✓ 愛のまなざし。12 人を召し出しに呼ばれたときのイエスのまなざしのよう（ヨハネ 1・35-51）。
- ✓ 権威ある言葉。カペナウムの会堂でのイエスの言葉のよう（ルカ 4・32）。
- ✓ 相手と近しくなれること。サマリアの女に対するイエスのよう（ヨハネ 4・3-34, 39-42）。
- ✓ 傍らで共に歩み、旅の仲間になるという決断。エマオへの道を行く弟子たちに対するイエスのよう（ルカ 24・13-35）。

したがって、共に歩むということは、次のことを意味します：

- その人が歩んでいる旅路、たどり着いている地点、どちらへ向かおうとしているかを知っていること。共に歩むために。
- 絆を結ぶ機会となる**出会い**があるようにすること。功利主義的ではなく、人間的で、人間性を育む出会い。
- **耳を傾ける姿勢**（ここで再び、耳を傾けるわざについて触れます！）。その人がどこから来ているのか、歩んでいる旅路、悲しみ、希望のなさ、疲れ、模索など、置かれている状況を知り、理解するのを可能にします。
- それはまた、常に**仲介**の出会いでもあります。なぜなら、本当の同伴者は聖霊だからです。
- 旅の仲間に伴伴する人は、同伴される人のうちに働く聖霊の働きを**あかしし、告げなければなりません**。しかし、静かに、脇に留まりながら、ほかの場所ではなく、与えられた場所にいることで満足して。本当の意味で、霊的同伴者はまず、**神が出会いに来てくださったという根本的体験**のうちに形作られた人です。
- 私たちの人生・生活の中で神がご自身を顕されるのを発見すること。それは、**神が出会いに来てくださるとき**私たちが驚かされるほどです。
- **率先して動かれるのは常に神です**；私たちは責任と自由を示さなければなりません。

以上のことは、霊的伝統において大変一般的である**漸進的歩みの教育**という手段によって取り組まれます。「キリスト者の生活は、深さや成熟のそれぞれの度合いにしたがって漸進的に歩まれ、そして常に、より大きな成長へと開かれたものである。」¹³

- 内からも、外からも**強制**されてはならないプロセスをたどりながら。

- たどっているプロセスを意識し、それを自分のものとするほどに。その歩みを一人ひとりのうちに解き放つのは聖霊であることをふまえて。

IV. どのような司牧活動を……？

これは、今年の終わりに完全なものを示すストレンナの最後の部分になります。ここまで述べてきたことの司牧への適用について取り上げるからです。今日の教会の、司牧の戦略的ポイント（鍵）について、そして私たちサレジオの**霊性**に固有なものについて触れるつもりです。次の点について考えたいと思っています。いくつか見出しとなる可能性のある点だけ挙げます：

- この道をたどらなければならない若者、家庭、父親、母親たちと共に歩むもの。世

¹³ STEFANO DE FIORES, *Itinerario espiritual. Voz en Nuevo Diccionario de Espiritualidad*, Paulinas, Madrid, 2004, p.755.

界中のサレジオ家族が使命の中で関わっているすべての人を思いながら。

- 聖霊は一人ひとりのうちに働いておられるので、誰も排除することなく、すべての若者に機会を提供するもの。
- 新しい世代の教育に責任があると感じる修道者、信徒、教育司牧共同体と共に。
- 大人が重要な、信頼に足る拠りどころとなるもの……。
- 適切な手段をもって。

V. サマリアの女と共に …弟子たちを呼ばれたイエスは、今日、どの目標に向かって私たちを導かれるだろうか…？

総長

アンヘル・フェルナンデス・アルティメ, *sdb*